

二〇〇四年も 中国映画に注目

— 中国映画あれこれ —

坂和章平

一. 『HERO (英雄)』の公開

二〇〇三年八月、中国映画『HERO (英雄)』が日本で公開され、大反響をよんだ。これは若者に大人気の『マトリックス』と同様のCG (コンピュータ・グラフィック) をふんだんに使用し、西の『マトリックス』、東の『HERO (英雄)』と称されて世界中にセンセーションを巻き起こしたからだ。大ヒットの要因は他にもある。それは①予告編でみせた、何千人という秦国の弓矢部隊の圧倒的迫力 (中国人民解放軍の全面的協力)、②黒澤明監督の『乱』(八五年)、『夢』(八九年)で見事な色のコントラストを見せた世界的衣装デザイナーのワタエミがつくり出した、赤・青・緑・白のカラーに分類された美しい色彩、そして③『史記』の『刺客列伝』で「壮士ひとたび去つてまた還らず」とうたわれた、秦の始皇帝暗殺「未遂」事件という史実に根ざした壮大なドラマの魅力等だ。始皇帝暗殺をテーマにした名作は何といつても一九九八年の中国映画『始皇帝暗殺』だが、古くは日本映画にも、勝新太郎が始皇帝を演じた大映映画の七〇ミリ超大作『秦・始皇帝』(六二年)がある。

二. 新生中国の歩みと中国の第五世代監督

『HERO (英雄)』の監督は、張藝謀 (チャン・イー

20

モウ)。『紅いコリーヤン』(八七年)、『活きる』(九四年)、『あの子を探して』(九九年)、『初恋のきた道』(〇〇年)等々有名監督だ。これに対し、『始皇帝暗殺』の監督は陳凱歌 (チェン・カイコー)。『黄色い大地』(八四年)で一九八五年口カルノ映画祭銀豹賞を受賞し、その後『さらば、わが愛/覇王別姫』(九三年)、『キリング・ミー・ソフトラリー』(〇二年)等のヒット作を次々と送り出している監督だ。この張藝謀、陳凱歌さらには『青い嵐』(九三年)の田壮壮 (ティエン・チュアンチュアン)等は新生中国の映画製作をリードしてきた人達で、中国第五世代監督と言われている。

中華人民共和国は一九四九年一〇月一日に建国され「新生中国」の歩みが始まったが、その道は平坦ではなかった。六六年五月に発令された毛沢東による文化大革命の嵐は、その後一〇年間中国全土を吹き荒れた。七一年以降とられたのが「下放政策」。知識階級の子弟たちを貧しい農村の土の上での生産に従事させることによって、都会のブルジョアの生活を捨てて労働の喜びを理解させ、労働者・農民の連携の必要性を身体で覚えさせるという政策であり、革命思想の再教育を目的としたものだ。文化大革命は七七年

からようやく終結し、翌七八年、文化大革命中、門を閉ざしていた北京電影学院が再開された。その第一期生として入学したのが張藝謀達だ。彼らは八二年に同学院を卒業するや僻地の映画製作所に赴き、次々と作品を発表した。その代表作が、世界的注目を集めた前述の『黄色い大地』や『紅いコリーヤン』。この八〇年代半ばに中国映画界に興った新潮派 (ヌーベルバーク)こそ、中国第五世代監督達の功績だ。

中国は、毛沢東 (革命第一世代)の時代から鄧小平 (革命第二世代)の時代に移り、改革・開放政策が進んだ。そこに突如起こったのが八九年の天安門事件。「民主化」を求める学生たちの運動や一〇〇万人デモに対し、北京に戒厳令がしかれ、人民解放軍が戦車で天安門広場に突入した。この政治的な大事件によって、中国「民主化」の歩みにかげりがさしたものの、幸い改革・開放政策そのものの転換には至らなかった。中国はその後、江沢民 (革命第三世代)の時代を経て、〇三年には革命第四世代である胡錦濤体制に入っている。

三. 坂和流映画評論—二足のわらじをはきたくて

私は昔から映画が大好き。中学・高校時代は日曜・祝日

21

映画の常連だった。〇一年一〇月の坂和総合法律事務所ホームページ開設 (<http://www.sakawachawolf.co.jp/>)、趣味のページのスタートは私の本格的な映画評論の発表となった。〇二年六月『SHOW-H EYシネマールムI』二足のわらじをはきたくて』の出版、〇三年八月『社会派熱血弁護士、映画を語る SHOW-H EYシネマールムII』の出版により、今や私は弁護士稼業と(自称)映画評論家の「二足のわらじ」を履く毎日だ。既にパートIIIの出版も射程圏内だし、映画にみる様々な法律問題を楽しく分かりやすく坂和流に解説することを目指した『映画と法律』(仮称)の出版も今案し企画中だ。そんな私が皆さんに訴えたいのは、「今、中国映画が面白い」ということ。もちろんハリウッド映画にも、〇三年第七回アカデミー賞を争った『キヤング・オブ・ニューヨーク』、『シカゴ』、『戦場のピアニスト』等面白く感動的な作品はあるが、近時は「短期集中投下資本回収型」の映画が増え、さらに『マトリックス』、『ターミネーター』、『チャーリーズ・エンジェル』、『トゥームレイダー』等に見られるように、安易なパートII、パートIIIの企画が多い。これに比べると中国映画にはすばらしい作品が多い。以下坂和流の「中国映画あれこれ」の一端を紹介するが、その全貌を知りたい方は是非シネマールムI、IIを読んで頂きたい。

22

四. 珠玉の名作のオンパレード
日本人が忘れていた美しい自然と父子の絆を思い出させてくれた映画が『山の郵便配達』(九九年)。これは八〇年代初めの中国湖南省が舞台。重いリュックを背負い険しい山の中を黙々と歩いて村から村へと郵便物を届ける郵便配達員の姿を描いたもの。父親の二泊三日の最後の郵便配達に同行した息子は、明日からは父親から引き継いだ仕事に誇りをもって、一人で出発することになる。

張藝謀監督の『活きる』(九四年) (カンヌ映画祭で審査員特別賞、主演男優賞を受賞)は、〇三年朝日ベストテン映画祭の外国映画部門で二位に輝いた作品。贅沢な家庭に育ちサイコロバクチにうつつを抜かした主人公福貴 (フークイ)は、妻の家珍 (チアチエン)からは見捨てられ、家屋敷もとられ一文無しになってしまった。しかし新国家建設によって旧地主階級が糾弾・処刑されたのを見れば、これはラッキー。文化大革命の「造反有理」というスローガンの下、一人娘の出産に不可欠な産婦人科医は「反動分子」とされ不在、若く未熟な看護学生が立ち会ったため、あえなく一人娘の生命は失われた。一九四〇年代、五〇年代、六〇年代という中国の激動の歴史の中、次々と襲ってくる不幸に対して主人公達が「影絵芝居」を糧としてこれと立ち向かい、懸命に生きていく姿は感動的。

23

自ら一〇代後半に下放された体験をもち、二〇代からフランスに留学、そのままフランスに残った戴思杰 (ダイ・シージエ)の原作・脚本・監督作品が『小さな中国のお針子』(〇三年)。文化大革命真っただ中の七一年、四川省の鳳凰山下に下放された一七才のマーと一八才のルオは二人とも医者の子。そこは一番近い町まで石段を歩いて九二日かかる辺境の村だが、実に美しい山。マーが持つのはヴァイオリン。荷物検査をした村長はもちろんヴァイオリンを知らず廃棄を命じるが、とっさの機転で弾いたのが「毛主席を想って」という曲。実はこれは日本人なら誰でも知っているお馴染みのモーツァルトのヴァイオリンソナタ。その美しい旋律が鳳凰山の山中に響きわたった。「お針子」との出会いのきっかけとなったのはバルザックの文学書。もちろん西欧の文学書などは厳禁。「再教育の成果」を強調してやっと都会に帰れることになった「メガネ」とあだ名された下放青年が隠し持っていた本だ。「文化大革命クソくらえ!」、『ピバ、青春!』と叫びたくなる、本当に心温まる美しい作品だ。

私が最も感動し涙をポロポロ流した映画が『北京ヴァイオリン』(〇三年)。中国南部の美しい田舎町に住むヴァイオリンの天才チューンは一三才の少年。「全国デビュー」のためには何としても北京へ。そして立派な先生に。父親は

24

そのための懸命の努力を続けた。ヴァイオリンの教師は、心の師チアン先生と成功者のユイ教授。国際コンクールで弾くチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲(チャイ・コン)の特訓が始まった。面白い脇役は、八〇年代の中国映画では考えられなかった、若くて美しく、金持ちの「パパ」に貢がせて生活している女リリ。国際コンクールに向けてストリーは最高潮を迎えるが、そこで次第に明かされていくチューンの出生の秘密。松本清張の原作を映画化した最高の日本映画『砂の器』(七四年)の後半、すなわちコンサート会場で主人公が弾くピアノ協奏曲のダイナミックで美しい旋律が流れる中、同時平行的に主人公の出生の秘密が解き明かされていく感動のシーンを彷彿させるストリー展開の中、ドラマはクライマックスを迎えることになる。「始まりは北京駅そしてラストも北京駅」という設定もオシャレ。涙をポロポロ流しながら、チューンが北京駅で弾くチャイ・コンのメロディーに酔いしれることうけあいだ。また田壮壮監督が、一九四八年の名作『小城之春』をリメイクして登場したのが『春の悪い』(〇三年)。タイトルからして何となく悩ましげ。抗日戦争が終了した翌年の一九四六年、蘇州にある小さな村にも春が訪れた。ここに住む旧家の地主夫婦は、今はセックスレス。こんな二人を日中戦争を戦った夫の親友が訪れた。ところが何とその親友

は妻の昔の同級生。この映画は、こんな小さな村に生きる旧家の人々の不安と倦怠、そして三人の主人公たちの秘めやかな愛情と友情を描く静かな心理ドラマ。ベッドシーンはおろかキスシーンの一つもないものの、男女の愛情と男同志の友情を実に見事に見せてくれる、今時珍しい映画だ。

五. 第六世代監督の登場と今後の中国映画への期待
マイナーな映画館で観た『鬼が来た! (鬼子來了)』(〇〇年)カンヌ国際映画祭グランプリ受賞作)は、中国を侵略した日本軍の残虐非道ぶりを中国側の視点から描いたショッキングな映画で、新聞紙上でも再三取りあげられていた話題作だ。この映画に主演した姜文 (チャン・ウエン)は、『紅いコリーヤン』(八七年)、『芙蓉鎮』(八七年)、『春桃』(八八年)等に出演した名優だが、この映画では自ら監督をつとめている。また、同じく姜文が主演し製作したハリウッドタッチの映画が『ミッシング・ガン』(〇三年)だが、その監督はまだ三〇代の陸川 (ルー・チュウアン)だ。彼らは第六世代監督といわれ、今後の活躍が期待されている。彼らの映画づくりを含め、二〇〇四年も中国映画の発展を期待し、これを見守っていききたい。(弁護士)

2004年1月1日 印刷
2004年1月5日 発行
法苑 No.134
非売品
編集 新日本法規出版株式会社
発行人 代表者 昭三
印刷 新日本法規出版株式会社印刷部
発行所 名古屋市中区栄1丁目23番2号
新日本法規出版株式会社
〒460-8455 電話 (052)211-1525(代)

24